

令和 2 年 6 月 24 日現在

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K08892

研究課題名(和文)臓器提供意思表示行動など高関与型向社会的行動の説明モデルの構築と検証

研究課題名(英文)Construction and verification of a model for explaining highly proactive social behavior

研究代表者

瓜生原 葉子 (Uryuhara, Yoko)

同志社大学・商学部・准教授

研究者番号：70611507

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、国際的に解明されていない臓器提供意思表示という「高関与型向社会的行動」における行動決定要因を明らかにし、行動を説明するモデルを構築することを目的とした。

学際的・網羅的な先行研究調査、および日本人1万人を対象とした定量調査の分析結果から仮説を導出し、アクションリサーチ組織Share Your Value Projectを主体とした社会実装と検証を行った。また、4か国を対象とした国際比較調査も行い、得られた結果を総括して「高関与型向社会的行動の変容メカニズム図」を導出した。同時に、行動変容を測定する尺度の開発、実証を通して科学的手法の標準化を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は4点ある。まず、社会課題解決のアプローチとして、個々の行動を社会に望ましい方向に変容させることの重要性を示したことである(社会的意義)。2点目は、今まで世界的に解明されていなかった「高関与型向社会的行動のメカニズム」を導出し、科学に基づく施策を可能としたことである(学術的意義)。3点目は、行動変容を促すために、ソーシャルマーケティングの適用の有用性を示唆したことである(社会的・実践的意義)。4点目は、次世代の育成に寄与したことである。学生とともに社会で自治体・市民団体とともに実証を行ったところ、論理的思考だけでなく、課題発見力、創造性、主体性を醸成することができた(教育的意義)。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the behavioral determinants in the declaration of intent to donate organs as "highly involved prosocial behavior" that has not been elucidated internationally, and to construct a model to explain the mechanism of behavioral change. We conducted an interdisciplinary and comprehensive literature review, and combined the results of a quantitative survey of 10,000 Japanese people to derive a hypothesis about the behavioral mechanism. Share Your Value Project, an action research organization in my laboratory, verified the hypothesis through social implementation. In addition, we also conducted an international comparative survey targeting four European countries and summarized the results obtained to derive a "behavior change mechanism diagram of highly engaged prosocial behavior". At the same time, we standardized scientific methods through the development and demonstration of a scale for measuring behavioral changes.

研究分野：行動科学

キーワード：行動変容 高関与型向社会的行動 意思決定 臓器提供意思表示 ソーシャルマーケティング 国際比較

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 焦点をあてるべき課題「臓器提供の意思表示行動」

代替治療のない臓器不全の治療法として臓器移植の重要性は高い。日本の移植技術は世界最高水準にあるものの、脳死、あるいは心停止からの臓器提供者(以下、ドナー)数は先進国で最も少なく、ドナー不足に起因する患者の治療機会の逸失は、深刻な社会的問題の一つである。また、他国に頼る日本の渡航移植は、世界的な倫理批判を受けており、国際問題の一つにも発展している。移植医療には、第三者の善意の臓器提供が不可欠であり、ドナー家族の意思決定が重要であるが、その基礎となるのが、ドナー本人の「臓器提供意思表示(以下、意思表示)」である(瓜生原,2012)。特に、本人の明確な意思表示がない場合にその意思決定が家族に委ねられるopting-in 制度を採用しているわが国では、本人の意思表示は大変重要な役割を担う。

しかし、これまで、世界でも類のない多様な意思表示手段が整備され、国民に向けた大規模な啓発の努力がなされているにもかかわらず、国民の意思表示率は12.7%に留まっている(内閣府,2017)。また、従来の知識伝達を主眼とする啓発活動では行動変容にはつながらないとの報告(Thomson, 1993; Jacob, 1996; Wold, 1997)も散見される。すなわち、「意思表示という行動変容」に結び付く、より深化した科学的手法の開発と標準化が喫緊の課題である。

(2) 意思表示行動を説明するモデルの必要性

意思表示行動の変容について、2つの視点が必要である。1点目は、意思表示行動の分類である。「社会に望ましいとされる行動」が、個人の価値観や信念に大きく関与していたり、行動した結果が社会的・心理的リスクを負う可能性がある場合、「高関与型の行動」と考えられる。より良い社会を創るため、「社会に望ましいとされる行動」への変容を促進させることが必要であるが、その実現度は、その関与度などに依存すると報告されている(Kotler & Andreasen, 2003)。社会行動変容プログラムは、3つの主要要素(関与度が高いか低いか、行動が1回限りか継続的か、個人的か集団的か)で8つのカテゴリーに分類される。このうち、関与度が高く、継続的な行動は、行動変容の難易度が高く、さらに、グループによる決定の場合は最も難しいと言われていた。意思表示行動は、本カテゴリーに分類される。すなわち「高関与型」向社会的行動である。行動変容については、様々なアプローチがある中、Prochaska & Velicer(1997)が提唱した行動変容ステージモデル(Transtheoretical Model)を基軸にすることが適切と考えた。人間の行動変容は「無関心期」「関心期」「準備期」「実行期」「維持期」の段階を経るという考え方であるが、これを臓器提供意思表示行動に適用すると、「関心なし」「関心を寄せているが、態度については考え中」「態度を決定している」「意思表示をしている」「意思表示をした上で、その意思を家族や大切な人に共有している」という段階に分けることが可能となる。目標となる行動を自発的にとるまでのプロセスと促進因子を包括した変容メカニズムを明確化することが肝要である。

2. 研究の目的

本研究は、高関与型向社会的行動である「臓器提供意思表示」の行動決定要因を明らかにすると同時に、研究室内のアクションリサーチ組織 Share Your Value Project (以下、SYVP)での実装を通して、意思表示を促す新しい価値の創造、態度・行動変容を測定する尺度の開発、セグメント別の行動変容手法の開発を行い、科学的手法の標準化を行うものである。さらに、実際に意思表示率を高め、社会への直接的な貢献を目指す。

3. 研究の方法

(1) 意思決定行動に関する理論の網羅的調査

健康増進行動、環境配慮行動、消費者行動などの人間行動を説明する理論、およびその基盤となる社会心理学、行動経済学などを多面的、網羅的に文献調査し、整理した。

(2) 臓器提供意思表示の現状把握

日本人1万人を対象とした定量調査、大学生を対象とした定性調査、定量調査を行い、関心の有無や意思表示行動の有無に影響を及ぼす因子を特定し、仮説モデル図を導出した。

については、セグメント別(年齢、性別、個人の信条、移植関連要因)の行動変容段階の違い、行動決定要因についてSPSS、AMOSの統計ソフトを用いて解析した。また、「なぜ臓器提供についての意思表示に関心がないのか(n=1,168)」「なぜ心は決まったのに臓器提供意思表示をしないのか(n=1,343)」「なぜ臓器提供意思表示をしたのか(n=1,275)」の設問に対する自由回答結果について、SPSS Text Analytics for Surveysを用いてテキストマイニング分析を行い、行動決定要因のキーワードを導出した。

については、私学社会科学系大学生を対象とし、意思表示のきっかけについてのインタビュー、意思表示者と非表示者を交えてのフォーカスグループインタビューを行うことにより、各行動段階から次の段階に移行する行動決定要因について、深い示唆を得た。さらに、私学社会科学系大学生約200名を対象としたアンケート調査を実施した。

(3) 社会実装による仮説検証

導出したモデル図を基に、Lee and Kotler (2016) が論じたソーシャルマーケティングを進めるための10ステップに則って介入方法を策定し、実装研究組織(メンバーは研究室の大学3年生約20名)を研究室内に立ち上げ、自治体、医療従事者、市民団体との協力関係を構築し、仮説検証型の社会実証を行った。これを通して、意思表示を促す新しい価値の創造、態度・行動変容を測定する尺度の開発、セグメント別の行動変容手法の開発を行い、その結果を分析した。

(4) 国際アンケートによる定量調査

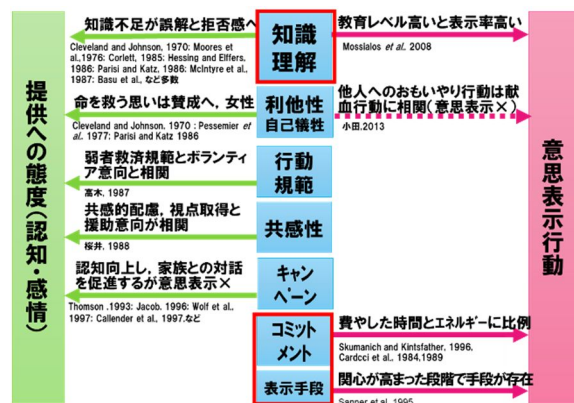
行動ステージの分布や、人々が関心を持ち、意思決定をし、行動をとるプロセスについて、国により異なる因子、国を超え共通の因子を探索するため、欧州4カ国(スペイン・フランス・ドイツ・イギリス)を対象としたwebによるアンケート調査(母国語による)を行った。

これらの国々における臓器提供方式(臓器摘出要件)が異なる。スペインとフランスは、opting-outを採用しており、「臓器提供を希望しない」と生前に明確に意思表示されていない場合は、臓器提供を同意していたとみなされる。一方、ドイツとイギリスは、opting-inであり、「臓器提供を希望する」という明確な意思表示に基づき、臓器提供が実施される。その違いが行動に与える影響についても分析した。

4. 研究成果

(1) 意思決定行動に関する理論の網羅的調査

多分野における網羅的な先行研究レビューにより、態度と行動に影響する因子は異なることが示された(右図)。



(2) 臓器提供意思表示の現状把握

日本人1万人を対象とした定量調査、大学を対象とした定性調査、大学生を対象とした定量調査を行った結果、右図に示す通り、以下が明らかとなった。

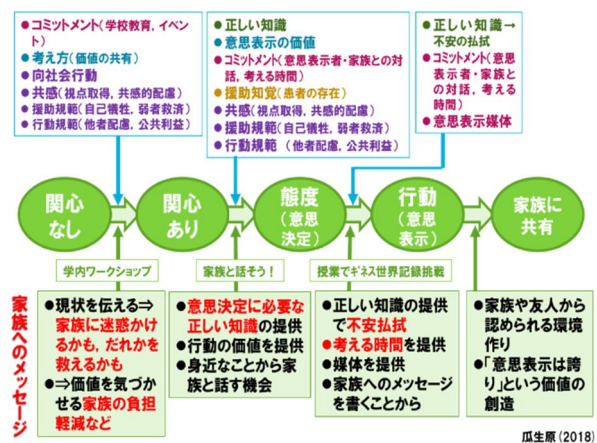
臓器提供意思表示行動における行動変容ステージモデルの適用有効性が確認された。

臓器提供は必要なこと、良いこと、行動には賛成ではあるが、不安と感じている人々が多い。

特に介入を要する段階が明らかとなった。関心がない人に関心を持たせる段階、意思表示の意図がある人に、実際に表示という行動を起こさせる段階に障壁がある。

意思表示行動の段階によって、その障壁

を取り除くための望ましい方策は異なる。関心を持たせる段階では、学校教育やイベントを通じて、「臓器提供の価値」についての知識を提供し、共感や援助規範を高めることが有効である一方、行動に移す段階では、不安を取り除くこと、意思表示者や意思表示について話し合い、行動する機会を提供すること、表示媒体を提供することの有効性が示唆された。また、意思表示の価値を、『誰かを救うもの』から『家族へのメッセージ』へと転換することの重要性も明らかとなった。



(3) 社会実装による仮説検証

導出したモデル図に基づき、社会科学系大学生732名を対象とした年間キャンペーンを展開したところ、行動ステージに合った介入を行うことで、関心がない人を31.9%から8.5%に減少させ、意思表示率を14.4%から24.9%に増加させた。

「臓器提供意思表示=残された家族へのメッセージ」価値を提示することは、イメージ変容に有効であることが示された。また、関心をもたせる段階では、イベントによる共感を促すこと、最も障壁の高い行動へと促す段階では、正しい知識の提供、意思表示への関与の程度を高めるこ

と、関与の程度が高まった状態で意思表示手段を提供することの3点の重要性が実証された。

同時に、行動変容を測定する尺度の開発、実証を通して科学的手法の標準化を行った。また、測定ツールについては、Wi-fiがない環境で、筆記用具がなくても楽しく回答できるビンゴ型アンケートなど、回答者や実施者に負担を与えないツールを複数開発し、その妥当性を実証した。



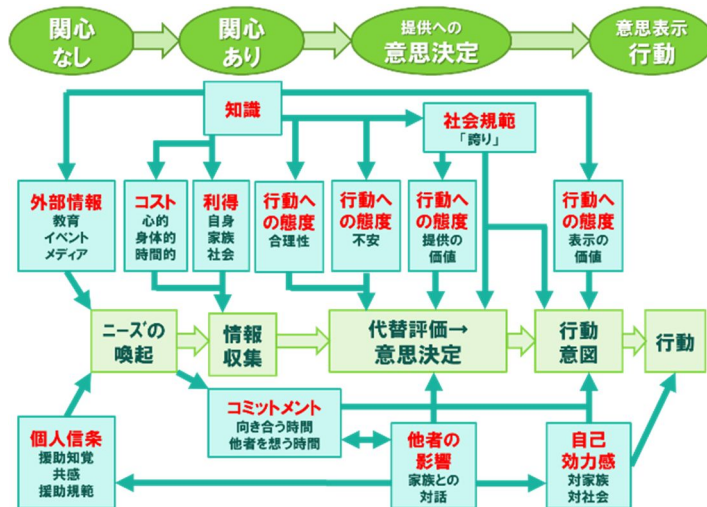
(4) 国際アンケートによる定量調査

4か国共通の傾向として、関心を持っている人々は、家族と話した経験頻度、寄付経験の頻度、ポジティブなイメージ(役に立つ, 身近, 家族思い合う, 社会に良い事), 臓器提供にポジティブな認識, 正しい知識, 合理性, 提供の価値の認識, 意思決定の価値の認識, 知識の正答率が高く, 不安が低減されていた。意思決定をした人々は, 家族と話した経験頻度が高く, ネガティブなイメージ(不安, 怖い)と臓器提供に対する不安が低く, 誇りと感じる人が多かった。また, 「脳死が人の死」という認識, 宗教の信仰度は, 関心度や意思決定に影響が認められなかった。

(5) 臓器提供意思表示行動を具体例とした高関与型向社会的行動の説明モデル

総括した結果図のモデルが導出された。

無関心層に対しては、教育、イベント、各種メディアにより、情報を提供することが必要である。この場合、移植を待ち続けている人の厳しい現状、臓器移植の良好な成績や移植後の生活の質の向上を伝えることが肝要である。知識提供型に限らず、移植待機者、移植者の生の声を届けることも、効果的である。それらに対して、各人が持っている助けたいという思い(援助知覚), その人の問題が早く解決したらよいななどの思い(共感的配慮), 何らかの助ける行動をおこななければ(援助規範)などの『個人信条』が惹起され、関心が発生する。



次に情報を収集しようとするが、その際、意思表示をすることが家族の心的負担を軽減する、移植を待っている人を救えるなど、自身のみならず、家族や社会に対する『利得』についても考える。一方、死後のことを考える心的負担、難しい問題に向き合う時間などを『コスト』と捉えるであろう。また、この頃から、臓器提供に関する情報収集をし、考える時間が長くなる。すなわち『コミットメント』が大きくなるほど、その費やした時間に対するベネフィットを求め、意思決定や意思表示が促される。

情報を収集した後、「提供する」「提供しない」「今はまだ選ばない」の3案からいずれかを選ぶ。この時に影響を及ぼすのは、「死後の臓器提供」という『行動への態度』である。これらは『合理性』、『不安』、『提供の価値』3つの要素で構成されている。『合理性』は、自分が死んでしまった後なら臓器を取られても痛くない気がする、提供することで誰かを救うことができる、などの考えである。これが高いほど、意思決定や行動につながるが、前者を変容させることは難しい。後者については、1人から最大11人を救うことができる事実などを伝えることは、効果的であろう。『不安』は、摘出により身体が大きく損傷する可能性があるのではないかという不安、脳死判定が容易に行われているのではないかという不安など、誤解に由来するものが多い。したがって、正しい情報を提供し、誤解を払拭させることで不安を軽減し、意思決定を促すことが可能となる。『提供の価値』は、他人の体の一部として生き続けることで家族の悲しみを減らすことができる、臓器を提供することは家族の誇りになる、などである。ドナー家族の心境に関するストーリーなどを伝えることで、認識が高まると考えられる。

一方、家族と対話するなど、『他者の影響』は大きい。家族との対話は、提供について考えることの大切さをともに確認でき、家族の自分への思いを共有することができる。その結果、不安な気持ちの軽減にもつながる。また、提供の価値に「家族の誇り」という認識があったが、これは『社会規範』と考え得る。誇りという価値観が社会全体で醸成されていれば、臓器提供への意思決定へのハードルは下がる。

意思表示という行動の意図に影響を及ぼすのは、まず『行動への態度』であり、具体的には、意思を伝えておけば家族に負担をかけなくて済むといった認識である。この事実を知らせるこ

とは、意思表示の意義の対象が、見知らぬ他者から家族へと移るため、自分ゴトとして捉えて、行動変容が促進されるのである。

次に『自己効力感』であるが、自分が意思表示行動を取ることが、家族のためになる(対家族)、移植を待っている誰かを救うことができる(対社会)という感覚であり、計画的行動理論における「行動コントロール感」、すなわち、自分の意思でその行動を制御できていると感じるかどうかに対応する。

さらに、意思表示することが「誇り」と感じるものが、肯定的な影響を及ぼす。これは『社会規範』であり、計画行動理論の、「その行動を取ることに他者が賛成するかどうか」に対応すると考えられる。

今後、本モデル図が、高関与型、もしくはあらゆる向社会行動に普遍的であるかどうかについて探究していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 横田貴仁・瓜生原葉子	4. 巻 6(1)
2. 論文標題 一般啓発活動の効果測定を容易にする媒体の探索的開発	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本腎移植臨床学会雑誌	6. 最初と最後の頁 42,47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 瓜生原葉子	4. 巻 70(3)
2. 論文標題 ソーシャルマーケティングによる行動変容	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 41,69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14988/pa.2018.0000000367	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 八木匡・瓜生原葉子	4. 巻 12
2. 論文標題 行動変容のメカニズムと政策的含意	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 行動経済学	6. 最初と最後の頁 26,36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11167/jbef.12.26	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 瓜生原葉子	4. 巻 69
2. 論文標題 アクションリサーチによる行動変容の実証 臓器提供意思表示を一例として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 203-228
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14988/pa.2018.0000000056	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横田貴仁・瓜生原葉子	4. 巻 6
2. 論文標題 一般啓発活動の効果測定を容易にする媒体の探索的開発	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本腎移植臨床学会雑誌	6. 最初と最後の頁 42-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yoko Uryuhara	4. 巻 9
2. 論文標題 Success Factors for Social Systems to Increase the Number of Organ Donations -From the Perspectives of Mechanisms and Organizational Behaviors-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 International Journal of Clinical Medicine	6. 最初と最後の頁 59-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4236/ijcm.2018.92007	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 瓜生原葉子	4. 巻 71(1)
2. 論文標題 自治体との協働による市民の行動変容促進 臓器提供意思表示のリーフレットを活用した事例	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 133-154
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14988/pa.2019.0000000148	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瓜生原葉子	4. 巻 71(1)
2. 論文標題 高関与型向社会行動の変容に関する文献的考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 197-222
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14988/pa.2019.0000000151	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瓜生原葉子	4. 巻 14(1)
2. 論文標題 臓器提供意思表示への行動変容を支える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本移植・再生医療看護学会誌	6. 最初と最後の頁 10-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神馬幸一, 旗手俊彦, 宍戸圭介, 瓜生原葉子	4. 巻 34
2. 論文標題 臓器移植医療の過去・現在・未来	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 年報医事法学	6. 最初と最後の頁 34-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瓜生原葉子	4. 巻 71(2)
2. 論文標題 態度・行動変容に寄与する知識に関する実証研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 31-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14988/pa.2019.0000000457	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瓜生原葉子	4. 巻 71(3)
2. 論文標題 臓器提供への態度および意思表示行動に関する国際比較調査結果(2)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 129-148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14988/pa.2020.0000000041	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瓜生原葉子	4. 巻 71(4)
2. 論文標題 臓器提供への態度および意思表示行動に関する国際比較調査結果(3)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 145-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14988/pa.2020.0000000096	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瓜生原葉子	4. 巻 71(4)
2. 論文標題 向社会行動の変容に関する国際比較 臓器提供への態度および意思表示行動を事例として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 33-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14988/pa.2020.0000000093	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瓜生原葉子	4. 巻 71(5)
2. 論文標題 向社会行動のメカニズムの探究 - 臓器提供への態度および意思表示行動を事例として -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 同志社商学	6. 最初と最後の頁 155-183
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大迫夕莉, 瓜生原葉子	4. 巻 7(2)
2. 論文標題 高校生の意思表示行動に資する授業の開発	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本腎移植臨床学会雑誌	6. 最初と最後の頁 242-249
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計26件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Yok Uryuhara
2. 発表標題 Effectiveness of Stages-of-Change Model On Declaration of Intent for Organ Donation
3. 学会等名 International Social Marketing Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 瓜生原葉子
2. 発表標題 臓器提供に対する意識と行動 に関する国際比較調査結果
3. 学会等名 第54回日本移植学会総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 瓜生原葉子
2. 発表標題 臓器提供の意思表示行動 メカニズムの解明
3. 学会等名 第54回日本移植学会総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 瓜生原葉子
2. 発表標題 臓器提供意思表示への行動変容を支える
3. 学会等名 第14回 日本移植・再生医療看護学会学術集会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 瓜生原葉子
2. 発表標題 意思の尊重が可能な社会に向けての経営学的戦略
3. 学会等名 第48回日本医事法学会研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 瓜生原葉子
2. 発表標題 意思表示行動メカニズムの解明と 行動変容を促す施策の開発
3. 学会等名 第52回日本臨床腎移植学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大迫夕莉, 瓜生原葉子
2. 発表標題 高校生の意思表示行動変容に資する授業の開発
3. 学会等名 第52回日本臨床腎移植学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大西峻介, 瓜生原葉子
2. 発表標題 中学生の意思表示行動変容に資する授業の開発
3. 学会等名 第52回日本臨床腎移植学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 瓜生原葉子
2. 発表標題 臓器提供・意思表示の認識変容に寄与する知識の探索
3. 学会等名 第51日本臨床腎移植学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 瓜生原葉子
2. 発表標題 意思表示行動の変容に資する一般啓発媒体の開発とその活用
3. 学会等名 第51日本臨床腎移植学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 瓜生原葉子
2. 発表標題 態度・行動変容に関する実証研究 臓器提供意思表示を一例として
3. 学会等名 経営行動科学学会第20回年次大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 瓜生原葉子
2. 発表標題 確実な意思表示行動の促進：行動変容モデルに基づく年間キャンペーンの有効性
3. 学会等名 第53回日本移植学会総会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 瓜生原葉子
2. 発表標題 オプトアウト制度変更までに解決すべき課題 英国ウェールズ州一般に対する定量調査より
3. 学会等名 第53回日本移植学会総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 瓜生原葉子
2. 発表標題 意思表示に対する好ましい知覚品質の形成による意思表示行動の促進
3. 学会等名 第53回日本移植学会総会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 瓜生原葉子
2. 発表標題 臓器移植普及への取組み
3. 学会等名 第 2回TDM-QC研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 瓜生原葉子
2. 発表標題 行動科学で一般の意識と意思表示行動を変容させる
3. 学会等名 第30回日本脳死・脳蘇生学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 瓜生原葉子
2. 発表標題 意思表示を確実に増やす～ソーシャルマーケティングの適用～
3. 学会等名 第16回徳島臓器移植研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoko Uryuhara
2. 発表標題 BEHAVIOR MODIFICATION MECHANISMS OF THE INTENTION TO DONATE ORGANS:AN EMPIRICAL STUDY OF 10,000 CASES
3. 学会等名 World Social Marketing Conference 2017（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yoko Uryuhara
2. 発表標題 Encouraging Stages-of-Change on Declaration of Intent for Organ Donation through a Guinness World Record™ Challenge
3. 学会等名 World Social Marketing Conference 2017（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 瓜生原葉子
2. 発表標題 戦略オーケストラ - 臓器提供増加に資する総合戦略 -
3. 学会等名 第34回日本肝移植研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Yoko Uryuhara
2. 発表標題 Promotion of declaration of intent for organ donation. A joint effort with local governments
3. 学会等名 the 6th World social Marketing Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 瓜生原葉子
2. 発表標題 対話を促すevidence-basedイベントの実装とその検証
3. 学会等名 第55回日本移植学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 瓜生原葉子
2. 発表標題 「自分ゴトとして行動する」必要性の醸成と促進
3. 学会等名 第55回日本移植学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 瓜生原葉子
2. 発表標題 非医療系大学生を対象とした授業開発
3. 学会等名 第55回日本移植学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 瓜生原葉子
2. 発表標題 多様な視点で向き合うことが、対話をうみだす
3. 学会等名 第46回日本臓器保存生物医学会学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 瓜生原葉子
2. 発表標題 オプティグ・インの国々に共通の意思表示促進因子の解明
3. 学会等名 第53回日本臨床腎移植学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Yoko Uryuhara	4. 発行年 2018年
2. 出版社 James Cook University, College of Business Law and Governance, Townsville, Australia	5. 総ページ数 pp.180-196/ 315
3. 書名 Conference Proceedings International Social Marketing Conference: " Broadening Cultural Horizons in Social Marketing "	

〔産業財産権〕

〔その他〕

瓜生原葉子研究室のwebsiteを構築し、成果の社会還元を行った。 https://www.uryuhara.com/
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----